

第1回県立高等学校改革懇談会（平商業・四倉）記録

日時 令和4年7月25日（月）15時00分～16時30分
会場 平商業高等学校 平商の社会館
傍聴者 7名

進行

- (1) 開会
- (2) 県教育長挨拶

県教育長の大沼でございます。皆様におかれましては、日頃から本県教育推進に多大なる御理解と御協力を賜りまして、感謝申し上げます。

ただ今、懇談会委員の委嘱状を交付させていただきました。皆様には御多用中にもかかわらず委員をお引き受けいただき、さらに本日の改革懇談会へ御出席を頂きましたこと、心から御礼申し上げます。ありがとうございます。

また、本日は、いわき市全体の教育環境整備の観点から御意見を賜りたく、内田広之いわき市長にも御出席を頂いております。重ねて御礼申し上げます。

さて、福島県教育委員会におきましては、各界の代表の方々からなる、県学校教育審議会の答申をもとに、平成30年5月に今後10年間の県立高等学校改革の方向性を示す長期計画として、「県立高等学校改革基本計画」を策定いたしました。

この中では、少子化により県内の中学校卒業者の数が、10年間で約5,300人減少するという状況を踏まえ、3学級以下の学校は統合する方針を示すとともに、高等学校に求められる学びの在り方や地域における学校の役割などを踏まえ、各校の位置付けや特色を明確にし、魅力ある高等学校づくりを推進することとしております。

このため基本計画を基に、現在進めております前期実施計画期間中の成果と課題や昨年12月に策定した第7次福島県総合教育計画を踏まえ、令和6年度から10年度までの具体的な取組を示すものとして、後期実施計画を今年1月に策定いたしました。

後期計画の中で、この地域におきましては、平商業高等学校と四倉高等学校を統合し、商業教育の拠点及び情報教育の実施校として、地域産業を支える人材を育成する、新たな高校を設置する方針をお示しいたしました。

平商業高等学校は、大正2年に平商業補習学校として設置されてから、来年度で創立110年目を迎えます。また、四倉高等学校は、昭和23年に設立され今年度で75年を迎えます。両校とも地域を支える多くの有為な人材を輩出してまいりました。それだけに関係の皆様对学校に対する熱い想いは重々承知をしております。

しかしながら、将来を担う子どもたちに、より良い学びの環境を継続的に提供することが、県としての責務であると判断し、両校を統合する方向性を示したところでございます。

本日は、地域の有識者の皆様、さらには学校関係者の皆様などにお集まりいただきまして、後期実施計画策定の経緯、そして新たな学校の在り方等について御説明を申し上げ、皆様から御意見をいただきながら、今後の教育環境について、ともに考えてまいりたいと存じます。

どうぞ忌憚のない御意見を賜りますようお願い申し上げます。挨拶といたします。本日はど

うぞよろしくお願ひいたします。

(3) 説明 (担当)

(4) 懇談 (菅野県立高校改革監)

<懇談>

【菅野崇】(県立高校改革監)

本日は、地元自治体の代表として内田いわき市長に御出席いただいている。まず、市長の方から今回の平商業高校と四倉高校の統合に関して何かお考えがございましたらお聞かせいただければと思う。

【内田広之】(いわき市長)

前回、いわき総合高校と好間高校の改革懇談会に参加させていただいたときも一部重なることを申し上げたが、2つ申し上げたい。

1点目は、今回、平商業高校4学級、四倉高校2学級という現状、さらに定員割れが続いているという説明があった上で、現状規模を維持するのが難しいと流れだとは思う。しかし、まずは数ありきではなく、教育の内容に関して、地元の方々の意見をよく汲み取って御検討いただければと思っている。市全体の状況を申し上げますと、現在、若者の人口流出が進んでいる。いわき市の全体の人口は、32万6千人、震災直後35万人いた人口が年々減っている。2060年頃には大体16万人、一時の半分ぐらいの人口になってしまうことが推定されている。その背景として、若者の流出というところもある。先程来、紹介あったとおり、平商業高校や四倉高校から大学や専門学校へ進学をされている。首都圏の大学に入りやすくなっているという現状があると思うが、そういうことも人口減の中に含まれているという現状がある。これまでは地元の産業と結びついた形のカリキュラムという視点が、あまり意識されていなかった部分もあろうかと思う。四倉高校のデュアルシステムは、地元の企業と連携した素晴らしい取組だと認識している。今後は、地場産業ではどのようなものが求められているか、地元がどのような人材を求めているのかということと連動した形でのカリキュラム編成が必要だと思っている。いわき市の求人を見ると、高3時点での就職希望者は約700人いるが、求人が1400人分、大体倍の数はある。半分以上が製造業、建設業である。特に、女子は、いわき市外、県外への流出が進んでいる。いわき市では、男子の4分の1、女子の3分の1が就職をする段階でも市内から流出してしまっているし、大学・専門学校となるとさらに流出している状況がある。そのため、今後、地場産業と絡めたカリキュラム編成が大事だと思っている。是非、商工会議所が進めるような方向性とも連動して検討いただければと思っている。今回の統合について、地元の方々からの意見というのもあろうかと思う。数ありきで、数合わせみたいな感じでやっていくのではなく、地元の意見を聞いてほしい。前期実施計画では、いわき湯本高校、そして小名浜海星高校の統合があったが、統合高校が開校する段階であまり地元の意見、我々も意見を言いたかったという声も実際聞こえてきた。そのような反省も踏まえて、是非地元の意見を汲み取っていただきたいと思っている。

2点目は、今、最後に申し上げたこととも繋がるが、今日のような議論、そして教育委員会の中での議論など、議論をオープンにしてもらいたいということである。議論を尽く

してほしいというところがある。やはり、市民の中には、今日のような議論が進んで、数ヶ月後、数年後に方向性が固まったときに、もっと意見を言いたかったという人が結構いるのではないかと思っている。先ほど申し上げた統合校のときも、そのような声があったので、是非、今日のような議論の模様も議事録として作成されると思うので、ホームページやSNSであげていただきたい。正に、今日のような場というのも広く市民に開かれているはずなのだが、実際あまり知らない方々も多いのではないかと思う。関心はあるけれども知らないという方もおられると思う。是非、こんな議論が始まっていて、そしてこのような議論、意見交換が進んでいることも含めてオープンにしていきたい。そうすることにより、それに賛同する声や、別の意見が出てくるとは思う。とにかく、そういう形で議論をフルオープンにさせていただきながら、議論を尽くした形をとっていただきたい。

以上2点、地元の意見を聞いていただきたいということと、議論の過程をオープンにさせていただいて市民の方に情報を出していただく形で進めていただければと思っている。

【菅野崇】（県立高校改革監）

議論をオープンにしてほしいという御意見を頂いた。私たちも皆様からの声を聞いて、それを新しい学校づくりに反映していくことが非常に重要なことだと考えている。私たちとしても積極的にこういった場を皆さんに触れていただけるようにしたい。また、それを御覧になって、寄せられる御意見については十分に聞き取って学校づくりに努めてまいりたい。

また、地場産業との連動という、非常に大きな現在の課題を含めた統合校の在り方について提示していただいた。本日、四倉商工会の事務局長緑川さんに、出席していただいている。こういった地元産業という目で見たときに、統合校あるいは今回の統合自体でも結構だが、何かお考えがあったらお聞かせいただければと思う。

【緑川直行】（有識者）

四倉町の事業所の方々に意見を聞くと、皆さん、がっかりしている。今、四倉高校の生徒たちには地域の祭り等に参加していただいて、地域の担い手の一つになっていただいている。また、四倉高校を卒業した方も結構いらっしゃるの、学校がなくなってしまうという点に対してがっかりしている。また、前期で統合した遠野と湯本、遠野地区の商工会等の方からは、やっぱり周辺の活気が少しずつなくなってくるような気がしていると聞いている。だから、地元としては今、言ったような感じをもっていると思う。また、市長からもデュアルシステムという話があったが、デュアルシステムについては、令和元年度に当時の四倉高校の校長先生の方から話があった。その時の話は学級数が2学級、3学級以下だと統合の可能性があるので、四倉高校を特色ある学校にして、入学してくる生徒を増やしたい、その一つとしてデュアルシステム（デュアルというのはキャリア教育の一環で、授業の中で職業体験を長い期間でやる）を、1年間を通して学校で行い、特色ある学校にして生徒を増やしたい。生徒数が増えれば、学校も残って、地元にも貢献ができると思うのでやっていきたいというお話を頂いた。では、商工会としても協力をしていきたいと思います。ということで話を進めることになったが、新型コロナウイルス感染症の拡大ということもあって、学校では、なかなか実施することができなかつたのだと思う。やっと来年度から実施しようということで、商工会の各担当職員から会員事務所に声掛けをして、協力してくれるようお願いしている状況である。

今の説明を聞いていて、3学級以下だと質の高い教育ができず、4～6学級だとそれができると理由がよく分からない。データのようになっていてというのがあれば教えていただきたい。

また、12ページに再編整備による期待される効果と成果というのが両方一緒に載っているが、期待と成果は全く別物だと思うので、分けるべきだと思う。

今まで統合してきたところでは、多分メリットは当然あるでしょう。しかし、メリットじゃない部分、思っていたようにならなかった部分、それから新しく分かった課題などもあると思うので、そういうものがあれば教えていただくと、今後、この統合に関して、どういふものかというヒントになるのではないかなと思う。

それからもう一つ、地域で言われているのが、新聞発表で初めて知ったということ（統合を）。今の四倉高校は普通科が設置されているが、昔は水産科や農業科、家政科もあった。今は普通科だけ。平商業高校と統合すると、普通科はなくなり情報科になってしまう。これは、統合ではなくて、四倉高校が廃校になって平商業高校が拡充という形ではないか、どこが違うのだろうという声も出ている。地域の現状はそのような感じだ。

【中野正人】（県立高校改革室長）

これから四倉高校でデュアルシステムに取り組むにあたり、大変お世話になっている。統合校の方でも、その内容が引き継いでいけるのかどうかということも含めて、今後両校の先生方と一緒に検討してまいりたいと考えている。

3学級では充実した教育ができなく、4学級ならいいと、その違いがよく分からなかったという御質問を頂いた。教員の数というのは学級数に応じて、いわゆる標準法（高校標準法）という法律で決まっている。3学級と4学級では、教員の配置数も変わる一つのポイントとなっているというところもある。教員の数が少ないと、選択科目に制限がかけられたり、あるいは生徒たちへのきめ細かな指導という部分についても目がしっかりと行き届かなかつたりというような現状も考えられる。さらには、子どもたちは切磋琢磨する環境というところがやはり高等学校教育においては非常に重要な部分ではないのかと考えている。そうしたスケールメリットという部分についても、やはり4～6というところが必要な学校規模と考えられるということで、福島県学校教育審議会から答申として頂いていたところである。

【菅野崇】（県立高校改革監）

他に御意見など、皆さんから聞かせていただければと思っている。

では、今の地元の話ということで、企業との関わりなどもあるが、平商業側から見たときに、小野さんはどのようにお考えになっているか。

【小野賢司】（有識者）

まず始めに、私もこういった改革の会議に参加したのが今回初めてである。色々と資料や、御説明を聞かせていただいて、ここまである程度、基本構想をまとめられて本当に大変だっただろうなということがまず1点。

もう1つは、現状や説明を聞いて、こんなに子どもの減少が激しいということが今回後期計画のスケジュールの中の話だと思っている。しかし、今後ますます状況が変化して、これにとどまらずにまた、さらなる改革を続行していかなければならないのかということ

も危惧している。また、先ほど市長から、今後も定員割れの状況が続くのはよろしくないというような話があったが、私も同じ意見だ。やはり、ある程度充足した環境の中で授業が行われるというのが一番理想かなと思う。やはり、学びの場ばかりではなく、学校内での同級生または同窓生、卒業してからもそういった同じ学び舎で育った先輩・後輩、または同級生とのつながりというのも大事にしていかななくてはならないし、大事なものと思っている。また、そのようなものの大切さは卒業してから分かってくるものかとも思っている。そういった意味でも、ある程度の学校の規模は維持していくべきだと私も思っている。そういった中で、先輩が地元企業に事業経営をされている、就職されている、そういった部分での地元就職ができる、または、相談に乗っていただけるような部分でもやはり、先輩・後輩の絆は大事にしていかななくてはならないのかとも思っている。また、四倉の商工会の方からデュアルシステムや、地域のお祭りのこと、地元とのつながりが非常に希薄になっては困るという話をされていた。やはり、学校を中心として、または地域を中心として、地域の経済団体やまちづくり団体などとも関わりを持ちながら、郷土愛を醸成していきながら、進学のために一時期は首都圏に行っても、またある時期がきたら地元に戻ってくるような、そういった環境、郷土の想いを、郷土愛を持ってもらえるような地域とのつながりを持たせられればと思う。それを学校の教育にどう入れていくのかというところが難しいところだとは思いますが、必要なのかなと思っている。こういった人口減少、子どもの減少をどこかで食い止めるのはなかなか難しいと思う。しかし、やはり戻ってきてくれる人、または、近隣の自治体や地域からも、就職・子育てなどでいわき市を選んでいただけるような、町を超えて、町ぐるみで、そういったものをやっつけていけるような地域になっていければ、将来的にも人口減少が減っていくのも止まっていくのかとも思っている。

あと、最後になるが、1つ私の方からお聞きしたい。この6つの学校群は、進学指導拠点校から定時制・通信制の学校ということで6つの学校に分かれているが、例えば、平商業高校の場合だと就職を希望している学生と進学を希望している学生が約半々いるという説明だった。これから中学校の生徒が高校の進路を決めるときに、「僕は将来、大学に行きたい」という希望があり、その生徒から平商業高校という学校名が出たときには、いわき光洋高校や磐城高校、磐城桜が丘高校など、進学を目指すような学校に、中学校の進路指導では進めていくのか。もしくは、「就職、工業系の会社に進みたい、そのような勉強したい」という生徒には、工業系や商業系の高校にと、進路にあった高校の選択をさせるのか。これから高校の選択肢が少なくなっていくので、その学校の特色にあった、またはその学校を目指す子どもたちの将来のビジョン、夢をいかに具現化していく、叶えていくかの一つの選択肢でもある。そこをはき違えると将来違う方向にいつてしまっていて、卒業した時に私はこれをやりたかったのかという疑問が残りはしないかなと思う。やはり、中学校からの進路指導と高校のマッチング、それを超えて将来どんな人間になりたいかまで話は進んでしまうが、その辺りのところが大事かとも思っている。

【中野正人】（県立高校改革室長）

地域との関わりの中で郷土愛を醸成していくような教育活動というものが大切ではないかという御意見、これはまさしくそのとおりであると考えている。他の統合校や各高等学校においても、探究的な学びには取り組む形になっている。ここの統合校においても、四倉地域、平市内を合わせ、自分たちの生まれ育っている地域において、地域を知るとともに課題についてただ調べるだけではなく、解決策を見出すような探究的な学びというこ

とを通して、地元に対する当事者意識というようなものを醸成するような取組を行なってまいりたいと考えている。

また、6つの学校群について、実業系の工業・商業・農業という学校はこの6つの学校群におくと、職業教育推進校という位置付けにしている。職業教育推進校においては、商業・工業・農業の学びを通して、より深い学びの必要性を感じて大学等の進学を志す生徒はいる。また、そうした生徒の希望に対してしっかりとそれぞれの高校で対応していただいている。進学指導拠点校、進学指導重点校については大学進学をメインとした学校になる。キャリア指導推進校においては、大学進学はもちろんのこと、就職を希望する生徒にもしっかりと対応していくというような普通系の高校になっている。そのような説明をしながら、中学生に主体的に学校選択をしていただけるような説明を今後も取り組んでまいりたいと思っている。

【菅野崇】（県立高校改革監）

今、中学生の進路指導の話もありましたけれども、平二中の松本校長先生にも参加していただいている。中学生を指導する側から見て、今回の統合に関してどのようなお考えをお持ちか。

【松本仁志】（平第二中学校長）

今、お話をお伺いしていて、昔はなんとなく進路がはっきりしない子どもは普通高校にというところがあったように思う。これからの高校はどんどん統合されて、とりあえずというのがなくなってくるのかなと感じている。その中で、中学校として何をやらなくてはならないかということ、今いろいろな方々のお話を聞いて気持ちを新たにしたい。キャリア教育について、しっかりと指導していかなければいけない。なかなか難しいけれども地域の方の力をお借りしながら、職業体験、今はコロナ禍でなかなか難しいので、公民館の力をお借りしながら実施したいと思っている。企業や地域の方を呼んで仕事について子どもたちの前で語っていただく。そういう中で、自分に合っている仕事ってどんな仕事か、工業系か、商業系か、または医学系とか、いろいろ仕事はあると思うが、そういうことを見つけれられるような中学生を送りたい。高校に行ったら終わりではなくて、その先の職業観に、市長がおっしゃったように、やはり地元の地場産業に取り組んでいきたいとか、目先ではなく先のことについて学ばせていく。そういう中で具体的に、商業系の学校とか、総合学科の学校でこんなことを学ぼう、いわき湯本高校であるが医療系、そのようなところに行って深く学んで次のステップを目指していきたい。そういうことを総合学習など、色んな機会を捉えて、教育していく必要があると感じた次第である。中学校もしっかりとやらなければと気持ちを新たにしたいところである。

【菅野崇】（県立高校改革監）

先程来、話がある地域とのつながり、これからの職業観を見据えて教育をしていく必要があるという御指摘を頂いた。本日は地元の有識者として4名の方に参加していただいている。普段広く地元との関わりを御覧になって今回統合の計画についてのお考えなどを聞かせていただければと思う。吉田さんは、地域と色々関わっていただいていると伺っているが、今回の件について、どのようなお考えをお持ちか。

【吉田靖】（有識者）

四倉地区で個人的にフリーペーパーなどを発行しており、街なかを歩いていろいろな地域の皆さんに話を聞いている立場で申し上げさせてもらう。自分だけの意見だけでは仕方がないので、改革懇談会の委員になったということを経験の方々に伝えつつ、意見を聞いた。平商業高校と四倉高校とでは受け止め方が違うと感じる。平地区で聞いたわけではないが、やはり学校が残る地区となくなってしまう地区とでは当然受け止め方は全く違う。四倉町には四倉高校に在籍している子たちも、中学生で四倉高校に行きたいと言っている生徒ももちろんいる。四倉高校を卒業して四倉町で働いている、生活している皆さんもいる。はっきり言って、皆さん、本当にがっかりしている。統合をするというのが前提の懇談会だと思うが、その前に地元で話し合いをしたかった。もちろん、統合したくないという話が出るのは間違いないけれども。今度、「懇談会に出ることになった。」と言うと、「結局はもう統合は決まっている。」「統合を避けることはできないよね。」と、皆さん本当にあきらめているような、がっかりするような意見が随分多かった。私は、この職を引き受けることになって、県内の他の学校の先行事例も県のホームページで拝見したが、統合はこのまま進めていくのだらうと感じた。ただ、統合する以上はどちらの学校にとってもいい形で統合してほしいと思う。私は取材で街なかを歩いて色々と話を聞いて、地域の行事などにも関わってきた。今までのお話の中で、統合した後も地域との関わりを大切にしたいという話もあって、多分授業の中で大概、四倉についての課題等の解決に努めるとか、郷土愛を育むような授業があるということだが、正直、これは統合の形なので、まだまだ先々に議論することになると思うが、平商業高校で学んでいて四倉の郷土愛って果たして育めるのかという想いは個人的にはある。駅はいわき駅を使い、学校は平商業高校で、もしかすると校舎の使い方はまた別の議論だと思うが、平商業高校で学んでいわき駅から通っているような子たちで、郷土愛の授業になれば四倉地区に足を伸ばして、地域の方に話を聞くというような授業とかもあると思うが、それで郷土愛っていうのが一朝一夕に身につくものなのかなという気がする。私も個人的にフリーペーパーを作るようになってから四倉町に家を買って引っ越して、四倉町の住民になった。四倉地区に関わったのは10年ぐらい、住み始めてまだ5年ではあるが、四倉地区に骨をうずめるぐらいの気持ちで、好きになってしまった人間だ。私からすると、授業を通して郷土愛を身につけるのは大事だと思うのだが、どのような形でやっていくのか。例えば、先ほど商工会の方がおっしゃったとおり、四倉ねぶたという行事が毎年あって、四倉高校生はねぶたを作って参加をしているが、これも平商業高校と統合した後、ねぶたを作って参加しているのは、統合して3年とか5年はやると思うが、10年、20年経った後、果たしていつまで四倉地区と関わっていくのかなというのはちょっと個人的には思う。私の印象だが、正直、最初だけじゃないのという気がする。カリキュラムは先々の話であると思うが。街を歩いて皆さんに聞いた話では、なんとか存続してくれないかというのは、切実に言っていた。個人的な話になるが、父親が昔、四倉高校に勤めていて、フリーペーパーを作る前から実は四倉高校には父親に連れられて、遊びに行った記憶がある。夏休みに生徒がいないときなど、校庭で遊ばせてもらい出身校ではないけれど思い出はある。その学校がなくなってしまうのは大変残念だし、地域の皆さんも1月に新聞で報道されたのが1番最初だったと思う。それを見た時、「あれ」と思ったことと、地域では統合はいずれあるのではないかなという話が出ていたが、四倉高校が残って、別な学校が統合するのではないかなという希望的観測があった。発表する前に何かしら地域への説明がないものなのかなというのは地域を歩い

ていて皆さんからの感想で、私もそう受け止めた次第である。特に、郷土愛という話が何回も出ていたので、統合した後、四倉地区で授業の時だけ来て学ぶというスタイルになるかと思うが、郷土愛ということであれば、統合して関係がすぐになくなってしまいうのではなく、引き続き四倉地区のことは頭の片隅に置いた上での授業やカリキュラムを考えてほしいと思う。

【中野正人】（県立高校改革室長）

確かに離れたところで学校がなくなる地域と残る地域とその受け止めは違うということでは十分に理解できる。我々はこちらまで、前期計画の中でも統合の話を進めていく中ではそういった御意見等をたくさん頂いた。しかし、どこかは統合しなくては、教育環境として地域に高等学校教育をしっかりと残していくという観点からいくと、どうしてもせざるを得なかった、避けて通ることができなかったというところである。事前に説明がなかったということに関しては、私ども重く受け止めさせていただきたいと思う。また、平商業高校で学んで四倉の郷土愛が育めるのかというところ、非常に厳しい御意見であり、我々もしっかりと受け止めて、今後どのような教育活動の中に取り入れていくべきなのか、いかにそれを継続して、引き継いで新たな統合校の伝統としていくことができるのかということ両校の先生方と一緒に考えて取り組んでまいりたい。

【小西秀典】（平商業同窓会長）

私は会長（平商業高校同窓会の商友会会長）になって6年目になるが、ここ数年、入学式の挨拶に必ず入学生に伝えていることばがある。私は、事業を行っていて、会社に平商出身は12人いる。平商業高校だけの問題ではなく、商業高校の在り方が全国的に課題となっている。私たちが学生の頃はそろばん、簿記を習って資格を取って、そして学校内で商業実践があり学習をした。しかし、実際は実践的ではなかったのが現状である。銀行や会社に入って来る子たちが即戦力で使えるかということそうではない。では、商業高校で何を学ぶために入るのかということで、先ほど県の区分けで、職業教育推進校ということで、はっきりと区別されたということは、私はとてもいいことだと思う。現実、平商業高校でも半分が進学、半分が就職、実際に平商業高校に入ったが就職するところがないからなんとなく進学という子どももいる。私は、子どもたちに平商業高校に入ったらまず、「コミュニケーション能力、社会性を身に付けてください、商業高校はそういうところですよ」と話をする。企業はそういう人たちを求めている。最初から即戦力を高校卒業の子に求めていない。その実態を知るために、コロナ禍になる前まで体験学習でたくさんの生徒を受け入れていた。重機を操作させてそのメカニズムで目を輝かせることも、自分はその方向に進みたいなと気づく子どももいた。そのようなことをずっと続けてきた。

今日まで分からなかったが、当初、合併の話がいわき地区に出たときに、同じ学科同士で統合するものだと思っていた。例えば、あの当時でいえば小名浜高校に商業科があったので、商業科同士合併するのかなと思っていた。今回、四倉高校は普通科、そして平商業高校は今言った通り商業高校の相方という形だが進学半分、就職半分という中途半端な立ち位置である。結局は、商業高校の中で実戦に役立つ勉強をするためにその内容がコンピュータをはじめとして、非常に具体化してきた。その点では、高校で学んだあとに専門学校へ進む人が増えている。そのため、親の立場としても子どもが中学校から高校を決めるときに進学を目指すのか、それとも就職を目指すのかと考えたときに第一次産業である農

業高校、工業高校はそのままの形で残るが、商業高校はどのような形で残るのか非常に私は危惧していた。そのため、結論は「コミュニケーション能力をつけてください」ということになっている。また、実戦経験がないと就職する子どもたちは不安9割で、期待は1割である。やはり実戦経験が一番といったときに、先ほどデュアルシステムということが出た。開校まであと4年あるとすれば、四倉高校がこういう一つの絞ってデュアルシステムというものを推進してきたということになれば、この4年の間に色々協議を尽くして、特色ある商業高校にするためにこのデュアルシステムというものをどういう形で維持できるか。先ほど言ったが、実際の高校の中では商業実戦はそれほど実戦になりません。しかし、そのデュアルシステムをいかにミックスして、全国の商業高校に先駆けて取り組めればと思う。内容はこれからだと思うが、旧平商業高等学校がどんな形で商業高校の新しい形ができれば一番いいと思う。

最後に質問だが、四倉高校が廃校になる、なった場合には現在の県の施設だが、私は四倉町の人たちと深く関わっている経緯があるので、先ほど話に出ましたとおり、寂しいものは実際あると思う。何か地元の方たちに再利用という形で、何か廃校になった後の計画というのはあるのか。

【中野正人】（県立高校改革室長）

商業高校の在り方について、これも重要な論点だと思っている。商業高校の在り方というのは全国的に問われているのは、そのとおりであり、商業高校がいかにあるべきか、というところは、我々教育に携わる人間は非常に重く受け止めている。工業高校だと、「ものづくり」ということで表現される。商業教育においては、「人づくり」という視点をもって教員が生徒に関わっていく観点で取り組んでいる。本県においての商業教育はそのような状況にある。そのような人づくりの観点で、社会性を身に付けたり、コミュニケーション能力を身に付けたりするところは、社会に出て行く中では重要な部分であると考えている。また、デュアルシステムとそういうことを連動させていければという御意見であったのかと思う。統合校においては、両校の優れた取組を継承しながら、よりよい学校の教育内容等を検討していこうと思っている。今ほどの御意見もしっかりと受け止め、デュアルシステム、要は地域の大人の方と高校生とが触れ合いながら、学びを深めていくということにあるかと思う。そのようなものの在り方について、今後どのような形がいいのか、具体的に検討を進めさせていただければと思っている。

あともう一点、四倉高校が高校としての使用が終わった段階で、跡地の部分で何か案があるのかということについては、今現在は具体的な案はあるというところではない。まずは、統合の話をお示しさせていただいたところである。今後、跡地についてもどのような形がいいのか、自治体であるいわき市にも色々御意見を頂きながら検討してまいりたいと考えている。

【武藤與史昭】（四倉同窓会長）

平商業高校の小西同窓会長から、色んな意見を頂きまして本当に感謝申し上げます。今回の統合の件につきまして、県教委の方できめ細かく生徒の心情を加味した計画になっている。新しいやり方の中で、12ページのようなことがあるので、それを統合によって生徒が希望を持って人生を送られるようなカリキュラムを是非作ってほしいと思う。使われなない建物があると、その町全体が寂れていく。2年前の卒業式に四倉高校の当時の生徒の中

で、「この町は私たちが次に守るから」「ねぶた作りやその他の行事について私たちが必ず守ってやるから」と言った言葉が、今でも印象にある。この地域に高校生がいないことを想像すると、町の人たちも落胆するし、非常に寂しいものである。最高の利用方法として、私はこんなことを考えている。四倉高校の跡地利用について、若者が研修するような専門の学校、そういう施設にしていかなないと中学校でもう切れてしまい、四倉から若い人がいなくなってしまう。平商業高校に行っても家に帰れるような、帰ってお祭りができるような未来志向的な子どもたちを作ってほしいと思う。跡地利用の2つ目は、11年前の東日本大震災のとき、四倉支所も御託にもれず浸水したし、地震の津波に対しての立地条件が悪いので、支所を高台に移してほしい。あそこで色々な指令が出せればいいのかと思う。また、四倉中学校も敷地面積や海岸沿いにおいて豊間中学校と同じような条件である。もし、四倉中学校を四倉高校に移転できればいいのかと思うし、商工会議所と市民運動場、災害物資等の保管管理場所、いわき市の四倉公民館、第二公民館などに利用すれば、なんとか寂しさや四倉町のそういうさびれていくものが解消できるのではないかと思い、常日頃考えている。

今日の会議の中で高校生が四倉町に誰もいなくなるというようなことが非常に残念ではない。ですから、正常に統合されてもその想いは一つである。子どもたちが将来、自分の人生を設計する学科に入って、それなりのところを發揮できれば、これからの福島県、それからいわきの人材育成につながるのではないかなと思う。

【菅野崇】（県立高校改革監）

四倉地区の寂しい想いを聞かせていただいた。その中でも、跡地の利用の件や未来志向の話について御提案を頂いた。跡地については、統合と並行して考えなければならないその地域の課題だと考えている。これから、皆様には色々と御意見伺いながら検討してまいりたい。

【高野吉雄】（有識者）

私は、学校教育を長く勤めた関係で、この場に座っていると思う。皆さんが自分の御意見を色々とおっしゃられたが、私は現場の教員をやった中で、どういう感じだったかを感じたことだが紹介したいと思う。幸いにも私は、平商業高校で20数年、四倉高校でも講師で退職後3年ほど勤めた。四倉高校で勤めていたときに、生徒から部活動に対する要望があった。「私はこういうことをやりたいけど、できないよね」という話を生徒から結構聞いた。例えば、サッカーをやりたいけども、どうしても学級規模から部員が集まらずできないという声とかだ。もし、学級規模がもう少し大きければこういうことできるのに、生徒の希望に沿った部活動ができるのではないかということも多く生徒と話をしていて聞いたことがある。今の平商業高校の状況を資料で確認させていただいたが、昔あった剣道部や柔道部は、現在は資料にないということはやってない。そのようなことを踏まえると、生徒はやはり学校の勉強はもちろん大切だが、学校の生活の中でその部活動というのは意外と楽しみだったり、人格を作ったりするには、非常に大事な部分ではないかと思う。卒業してからも友達としてのつながりは部活動が非常に多い。ただ、今騒がれているのは、部活動は学校オンリーではだめで、地元の方でしっかりと連携しながらやっていかないといけないという話もある。ただ、そうは言っても、学校の中で部活動というのは生徒の生活の中では重要な部分だと思う。そのような意味からも私は、四倉高校がなくな

るという寂しい気持ちはもちろん分かる。しかし、中学生の気持ちになったときには、私はこういうことをやりたい、ああいうことをやりたいとなったときに、この県の方針である4クラス、5クラスにすれば、ある程度生徒の希望に沿った部活動もできるのではないかなという気持ちは持っている。ただ、生徒の気持ちを尊重するっていても限界がもちろんあるわけだが、今後県ではそういった学校の中での企画・立案、生徒の気持ちというのを少しでもくみ取れるような取組をしてほしい。具体的には部活動をやると思ったら、剣道・柔道などは指導者がいないとできない。しかし、教員の中ですべての人に、この部活動を指導してくださいと言ってもそう簡単にできるものでない。そういった細かいところの配慮が多分必要になってくると思う。そういうことを踏まえて、生徒の気持ちに沿った、その学校の組織づくりというのはこれからの運営の仕方の検討材料になると思うので、そういうことを含めて県の方での指針を示していただければと思う。それから各学校においても、生徒のために何が本当に必要なのかをよく考えながら検討委員会等で進めていただけるとありがたい。外部ではこれどうする、ああするというのは大人の世界での話があると思う。学校の中心は生徒だ。そういう生徒の立場に立ったところでの検討をお願いできればありがたい。

【菅野崇】（県立高校改革監）

今回、県立高校改革に着手しているが、その中で望ましい学校規模を4～6と学校教育審議会の方からも提言を頂いている。今、御指摘があったとおり、ある程度的人数をもった中で生徒が勉強であったり、部活動であったりということで多様な考え方をを持った人と触れ合うことでまた将来の人間、人格形成につながっていくということを期待されてのことだと我々も認識している。これから両校の代表で構成される教育内容検討委員会というものを設けて、さらに細部にわたって議論していきたいと考えている。

P T Aの方からも御意見を頂きたいと思っている。四倉高校のP T A会長は欠席されているが、小平さん、今お子さんを高校生で抱えているという立場で今回の統合など、どのように受け止められているか、教えてもらえるか。

【小平充】（平商業P T A会長）

統合の話聞いてから、小名浜海星高校、いわき湯本高校の会長と同世代なので、色々情報交換をさせていただいた。学校の運営については、着々と進み、ある緊張を持って統合となってくる。しかし、P T A組織や同窓会といった組織、他の地域との関係団体とか企業との擦り合わせが十分できてないまま統合が行われてしまっているところがあるというのを聞いた。私が危惧しているのは、私たちの勉強不足もあるのだけれども、こんなに人が集まって色々やっても全然公開されていない。興味がない人も多いとは思いますが、小学校・中学校の保護者であれば、本当に興味深いところだと思う。私自身のことで考えると、私も小名浜海星高校の会長もいわき湯本高校の会長も子どもは今、高校3年生で、これで子どもの高校生活はもう終わりである。そうすると、令和8年度まで、まだ4年間あり、このあと会長が何人変わるかわからないが、過去の経緯がわからないまま統合が進んでいくといったことがあると思う。是非、今まで統合した高校でのそのようなところをもとにロードマップ的なものを作っていただいて両校のホームページ、または行政のホームページでもいいので、こういった取組をして、いつまでにこれを決めてなどをお示しいただければと思う。また、今日私は初めて会議に来て、こういう場で地域の方々の意

見というのはものすごく重く受け止めた。やはり、受け入れる側となくなってしまう側とではものすごく気持ち全然違うということがあったので、PTA、同窓会、地元といったところでこのような会議とは別に、このような意見交換の場を設けなければいけないと感じた。お願いとしては、ロードマップの作成とか、このような会議・会議内容の公表をよろしく願いたい。

【中野正人】（県立高校改革室長）

前期計画で進めている統合校の例を踏まえた上で、ロードマップ等や今後の大きな予定を示してほしいという御意見ありがとうございました。今回のこの会議の内容につきましても、ホームページの方にはいつ行うという形で公表している。それから、会議の資料についても後日公表するような形をとっている。是非、そういう中で、ロードマップを両校の先生方と相談して決めたり、あるいは今までの経験値を踏まえたりして作成したいと考えている。それを、懇談会やホームページで示すという形でお示しさせていただきたい。

【菅野崇】（県立高校改革監）

両校の後援会長にも本日御出席いただいている。今回の統合について、御意見頂ければと思う。

【正木美穂】（平商業教育後援会長）

やはり、地元で高校生がいなくなってしまうこと。朝、私たちが通勤するような時間に「おはよう」と言って子どもたちが歩いていたり、バスに乗ったり、電車に乗ったりして登校する姿は爽やかだし、町にやっぱり活気を与えるものだと思う。放課後の部活動もそうで、活動している声が聞こえてくる。そういうことで町のみんなが元気を頂いている。例えば、三春町では、滝桜が咲く時期になると、地元の高校生が「三春ってこんな素晴らしい町ですよ」という地図を作成し、このようなお店があって、ここのものはとってもおいしいですなどをみんなに広く知らせようと思って、土日もボランティアで、それを皆さんに配付する活動をしている。私は、今まで四倉地区に足を運ぶことはそんなにはなかったが、四倉高校の皆さんは四倉町に貢献していたのだという想いを感じて、そこをやはり大事にしてあげたいと思う。こちらの平商業高校の校舎に移ってきても何かしら、授業の中でその四倉地区の人たちと関わっていくということ、何となくではなくはっきりと年間行事の中に組み込んでいってもらいたいということは今日感じた。

【片寄由美】（四倉部活動後援会長）

私は、普通科5クラス・家政科2クラスあった人数が多いときに四倉高校を卒業した。人数が多い、確かにいいかもしれない。でも、一人一人の名前は分かりますか。今、2クラスだが2クラスとも本当に仲が良いとお聞きしている。少人数だからできることもあるのではないかなと思う。切磋琢磨したい子もいれば、それを望まない子どももいる。それは分かっていたらいいと思う。

今、四倉駅はとてもきれいになった。そこで降りてこない子どもたちがいるというようなことを考えたときに本当に寂しいと思っている。私の娘は市内の別な高校に通っている。毎朝、四倉駅を利用しているが、その四倉駅では四倉高校の子どもたちも降りてくる。そこから地域の中を生徒たちが歩いていない。今は、全然想像できない。私の自宅は四倉高

校の近くなので四倉高校生は家の前を通る。とても楽しそうに毎日通っていていいなと思って見ている。そんな声が聞こえなくなるのは、どうなのでしょうと思っている。統合するのはもう決まっていることなのでどうにもならないが、本当に生徒一人一人の意見を大事に統合を進めていただきたいと切に願う。

【中野正人】（県立高校改革室長）

四倉町を高校生が歩く姿がなくなるということに思いを巡らすことはできないというような話だと思う。先ほども申しましたが、その地域において、統合校の生徒たちが地域の中での探究的な学びや何かしらの活動を行っていくというところは是非取り組んでまいりたいと思っている。確かに毎日の姿ではなくなってしまうと思うが、地域に対する課題意識や当事者意識、そういったものを醸成するような取組というのは是非今後も検討しながら進められればと考えている。

【菅野崇】（県立高校改革監）

想定した時間になってしまいました。御発言を希望される方がおりましたらお願いします。

【緑川直行】（有識者）

私が最初に伺った中で、3学級と4学級の違いは答えいただいた。今まで統合した学校で期待していたけど効果としてまだ出ていないところ、新たな課題が出たところがあったら教えてほしいという質問にまだ答えられていないと思う。また、四倉高校は普通科だけれど、普通科としての統合ではないという点。それは統合というけれど、廃校と拡充との違いはなく、同じではないかという点の2つについてお願いします。

【中野正人】（県立高校改革室長）

統合によるメリット、成果と課題というところの御質問かと思う。統合校においてのスケールメリットは、両校がそれぞれ2学級あるいは3学級の高校が統合によって規模が前よりも大きな学校になり、今まで設置できなかった部活動が設置できるようになったり、先生方の数が今までよりも増えたことによってよりきめ細かな指導ができるようになったりしている状況が出ているということは一つの成果であると受け止めている。一方、新たな課題があるのではないかとということにつきましては、統合したけれどまだ募集定員が100%充足していないという状況はある。しかし、その原因としてそれだけ少子化の状況が深刻だということもあると思う。統合前の両校の入学者数と統合後の入学者数を比べると統合校の方が充足はしないけれども、数は増えているという状況にあり、その地域の子どもたちは統合前のそれぞれの高校に行くよりも統合校に来ているという状況にはある。

もう一点、普通科であった四倉高校と平商業高校を統合して普通科ではなくて情報科にするということについては、両校をなぜ統合するのかということにも少し関係するが、四倉高校は、普通科の高校でありながら商業の学びも実践している。そうした学びの近いということもあって両校を統合するという流れもあった。また、普通科ではなくて情報科としたところにつきましては、昨今のAIの進行、IT技術の進化に伴って、専門的な知識が必要だという求めがあると私たちも考え、そういった意味でも普通科という汎用性

の高い学科よりは、そうした時代の必要性和ニーズを捉えた上で、情報科とさせていただいた。真正面からのお答えになっているかどうか分からないが、なぜ情報科にしたのかという点につきましてはそういうことである。

【菅野崇】（県立高校改革監）

他にあるか。では、最後に大沼教育長から一言、申し上げる。

【大沼博文】（県教育長）

長時間にわたりまして、皆様から貴重な御意見を頂きまして本当にありがとうございました。特に四倉地区の方々から、学校がなくなってしまうことに対する想い、色々お聞きしましたが、本当にその気持ちはよく承知をしているし、しっかり受け止めていかなければならないと思う。ただ、先ほども資料でお示ししたとおり、本県全体あるいはいわき市の子どもの数の状況を踏まえた上で、いわき地区全体の高校の在り方を検討した上での方向性であるということをお理解いただきたいと考えている。本計画が進んだとしてもいわき市内には県立高校は10を超える数がある。それぞれの学校は光る特色を持って、これから展開していけるようにしっかりと我々も地元の方々の御意見、学校の先生方の御意見を伺いながら、学校づくり進めてまいりたいと考えている。今日頂いた御意見も含めて、今後の懇談会で新たに方向性をお示しして、御意見を頂きながら進めてまいりたいと考えている。今後ともどうぞ御協力の程、よろしくお願ひしたい。ありがとうございました。

【菅野崇】（県立高校改革監）

長時間にわたり、御意見ありがとうございました。では、以上を持ちまして懇談会終了とする。ありがとうございました。

(5) 閉会